

論義書『尊談』の意義

——伝忠尋撰『七百科條鈔』との関係から——

渡辺麻里子

一、はじめに

『尊談』⁽¹⁾は、天台宗の学僧尊舜⁽²⁾（一四五〇―一五一四）が編纂した論義書である。三大部にもとづき編成しているため、広義には三大部の注釈書とも言える。集成された五百七十八題の論題や、各題ごとに挙げられる多くの証拠の文から、当時の学問の様相をうかがうことができる貴重な書である。

証拠の文に引用される多様な文献には注目すべきものが多⁽³⁾いが、本稿では、伝忠尋撰『七百科條鈔』（以下『七百科』と略す）に特に着目したい。『七百科』は、従来の研究において看過されてきたが、⁽⁴⁾関東天台の談義ではしばしば用いられた書で、『尊談』においても四十八条もの引用が確認できる。本稿では、『尊談』に引用される『七百科』の考察をもとに、『尊談』の意義を検討する。

二、『尊談』における『七百科』

まず、『七百科』が『尊談』に、どのように用いられているか確認しておきたい。

【資料1】叡山文庫真如藏本『尊談』止観一之二、第四問、依テ有相ノ行ニ、見ニト普賢ノ色身ヲ、可レキ云フ耶。

〔止観ニ云……弘云……又云……普賢經ニ云……勸発品云……安樂行記云（以下略）〕

【七百科】云、問、依テ有相ノ行ニ、見ニ普賢ノ色身ヲ耶。口決云、法花ノ行ニ有リニ行一、二行共ニ可レ見ル也。有相ノ行ト者、無ニ義味思量一行体已ニ見レ仏ヲ。是勝ニ無相ノ行懺悔ノ理観ニ也。無相ノ行観、無生ノ理観、是即念惣融即ノ解心也。^文（以下略）

【資料2】叡山文庫真如藏本『七百科條鈔』宗旨帖・第七十六条問、依テ有相ノ行ニ見ニ普賢ノ色身ヲ耶。口決云、法花ノ修行ニ有リニ行一、二行共ニ可レ見ル也。有相ト者無ニ義味思量ノ理一行体ヲ已ニ成ルニ見仏スル。是勝無相懺悔ノ理観也。無相ノ行観・無生ノ理観、是即念惣融即ノ解心也。

『尊談』では、有相行に依つて普賢の色身を感じするか、という問を立てる。この問は、『台宗二百題』においては義科（四種三昧義）に分類される「有相普賢」という題に相当し、天台の法華の修行にある有相・無相の二種の行法と、観を問題にしている。答としては、有相行によつても仏菩薩の姿を感じするとする。智顛は『摩訶止観』第二の四種三昧（法華三昧）の項に、「南岳師云、有相安樂行・無相安樂行。豈非_下就_二事理_一得_中如_レ是名_上」⁵⁾と述べる。『尊談』では、この『摩訶止観』の文を第一の証拠に挙げ、以下『止観輔行伝弘決』⁶⁾第二、『普賢觀經』、『法華經』勸発品、『安樂行記』など二十六の例証を並べ、さらに『七百科』を引用する。『七百科』では、「法華の修行には有相・無相の二行があり、二行共に、つまり有相行でも仏菩薩を感じする」と述べ、『尊談』の議論を補強する。

なお、『尊談』に引用された『七百科』は、『資料2』に示したように、『七百科』本文に一致する。同様に、『尊談』中に引用される『七百科』四十八条は、全て『七百科』本文中に確認できる。

三、忠尋と『七百科』

東陽房忠尋（一〇六五～一一三八）は、幼くして比叡山に登り、比叡山の長豪・覚尋に頭教を学び、良祐より灌頂を受け

論義書『尊談』の意義（渡 辺）

た。比叡山西塔北谷東陽房に住したため、東陽房と称される。大治五年（一一三〇）、六十六歳で天台座主となる。恵心流の復興に尽力し、その一派を東陽流と称した。弟子に、杉生流の祖皇覚の他、順耀・踰伽・觀照・行玄などがある。忠尋の口説は、恵心流において重視され、「東陽御義」「東陽口決」「東陽口伝」などとして、多く用いられている。

『七百科』は、忠尋の口決と伝えられるものを、後に集成し三大部に編成したものと思われる。玄旨（玄義）帖に二百十条、経旨（文句）帖に三百一条、宗旨（止観）帖に二百十四条、三帖合計して七百二十五条が収められている。一条ごとに問答形式とし、問に対する答に、「口決云」として、忠尋のものときれる口説を記している。

『七百科』の書名であるが、叡山文庫真如蔵本など、諸本の多くが『七百科條鈔』を内題とする。他に、『三大部七百科』、『東陽七百箇条抄』、『大綱深義抄』⁷⁾などの別称がある。書名の由来に関して、『七百科』宗旨帖の末に、興味深い記事がある。

【資料3】叡山文庫真如蔵本『七百科條鈔』宗旨帖・末

大綱口決_ニ云ク、今此七百科條_ト云フ意ハ、妙法_ノ二字_ノ法_ハ体_、法_ハ用也。付_テ用_ノ妙_ニ、有_ル一_百廿_重ノ_妙也。迹門_ノ意_ハ、一_々ノ_重ニ_離ル_ト六_識ノ_情執_ラ云_ヒ、本門_ノ意_ハ、各_々ノ_重皆_六識_本有_ノ法_ニ、無_キト_捨離_一云_フ也。故_ニ歴_レハ_一百_廿重_ニ七_百廿_重也。然_ラ

七百科條者、扱二大数^ニ也。所詮、当流ノ意^ハ、一宗ノ諸文皆取^メ七百科条^ニ、一法一文トシテ無^レキ非^ルコト、七百科條^ニ也。

大略を述べれば、迹門の六識の情執・本門の六識本有の法の「六」につき一百廿重を歴れば、六掛ける百二十重で、総計の七百二十重となる。それを概数として「七百」と称した、というのである。さらに、恵心流の心はすべて『七百科』に収められ、一法一文として『七百科』に無いものはないとも記し、その重要性を強調している。

『七百科』の成立時期は定かではない。『七百科』の諸伝本の奥書によれば、例えば、日光山輪王寺天海蔵本の本奥書には、元弘三年（一一三三）の書写と記され、金剛輪寺蔵本の奥書には、建武元年（一一三三）年の書写とあることなどから、少なくとも鎌倉時代末期には成立していたと考えられる。

『七百科』の現存諸本は多く、叡山文庫真如蔵本（写本一冊・三巻合）、叡山文庫生源寺蔵（写本一冊・三巻合）、叡山文庫華蔵院蔵（写本三冊）など十一本が確認され、その広がりがかがえる。叡山文庫真如蔵本の本奥書には、「御本者、上野州群馬甲桃井山小田松尾山柳沢寺東覚院権大僧都法印心俊御所持」と記され、中世に天台宗の談義所として著名であった、柳沢寺（現在群馬県榛東村山小田）の学僧が所持していたことがわかる。また叡山文庫華蔵院本の本奥書には、「時天正十四（一五六六）年南呂下浣於常州千妙寺写之。探題法印権僧正亮信」

と記される。千妙寺（現在茨城県真壁郡関城町黒子）もまた尊舜以来、著名な談義所であり、同様に『七百科』を蔵していたのである。こうした諸本の存在は、『七百科』が、関東の談義所で共通に用いられた書であった可能性を示唆している。

なお他に、『豪慶文義集』⁽⁹⁾では、『七百科』が三条引用されている。この書は、尊舜の師賢慶の談義も所収されている。賢慶は比叡山の学僧であると思われ、『七百科』が関東に留まらず、広く天台の談義の場で受容されていたことも推察される。

四、おわりに

本稿では、『尊談』中に引用される多くの文献のうち『七百科』に注目し、『尊談』の意義について検討した。『七百科』は、恵心流で重視された忠尋の口伝の集成と伝えられ、尊舜の時代には、談義所間に流通していたと考えられる。

『尊談』に集成された引用文献は、尊舜の学問のあり方に留まらず、関東天台における学問の諸相や、人と本の交流を示唆するものである。『七百科』の他にも、例えば『法命集』『鉄擻書』『説法明眼論』『円頓止観』など、注目すべき引用文献がなお多くある。今後はさらに、各論題の議論の内容も合わせて検討していきたいと考える。

- 1 『尊談』の概要は、拙稿「尊舜編『尊談』について」（『天台学报』四五号）に論じた。
- 2 尊舜の経歴等は、拙稿「尊舜の学系について」（『天台学报』四四号）に論じた。
- 3 拙稿「鷲林拾葉鈔」と『鞞塵抄』（『印度学仏教学研究』五二・二）で、『三百帖』に注目した。
- 4 『七百科』について触れた先行研究には、藤平寛田氏「日光天台藏『摩訶止観第二見聞』について」（平成十五年天台学会発表）がある。
- 5 大正四六・二四頁上。
- 6 大正四六・一九二頁中。『普賢観経』は大正九・三八九頁下。
- 7 『大綱深義抄』については、藤平寛田氏にご教示いただいた。
- 8 『七百科』はこの他、叡山文庫慈眼堂藏本（写本三冊）、叡山文庫双巖院藏本（写本二冊・玄旨帖欠）、叡山文庫池田藏本（写本一冊・経旨帖のみ）、叡山文庫金台院藏本（写本一冊・玄旨帖のみ）身延山久遠寺藏本（『大綱深義抄』一卷、寛正五年（二四六四）泰藝写、未見）などが知られる。
- 9 叡山文庫真如藏（真如・内・一五・三六・一一六〇）。写本十冊。全六十八題の論義書。

〈キーワード〉 尊舜、『尊談』、忠尋、『七百科條鈔』

（早稲田大学大学院博士課程修了）